

『こどものとも 0.1.2.』 『0.1.2. えほん』の研究

—動物に関わる育児語とオノマトペを中心に—

園田博文¹⁾

動物に関連した育児語とオノマトペに関する現代絵本の実態を明らかにするという日本語学的な目的のもとに執筆した。それと同時に、国語教育（母語教育）や日本語教育（第二言語教育）への研究成果の応用をも視野に入れている。0歳児や1歳児を特定の対象とした絵本は従来あまり研究されてこなかったが、現代社会では研究の必要性が増してきている。本稿は、1995年以降、0歳児や1歳児を主な対象とする絵本57冊を資料とする研究である。現在からの視点を重視し、動物に関わる育児語とオノマトペについて調査・考察した。その結果、動物名、動物に関連するオノマトペ、および、動物の絵のみ現れた場合を合わせた総数は298例であった。動物は全部で57種類現れていた。上位5種類はクマ・ネコ・ウサギ・イヌ・ゾウである。57種類の動物の呼び名は、全体で189例見られた。うちわけは、育児語が123例(65%)、成人語が66例(35%)であった。動物と共起する慣習的なオノマトペとしては、ネコの「にゃーん」、 「にゃんにゃん」(鳴き声)、ウサギの「びよん」、「びょーん」(動作)等が見られた。動物と共起する非慣習的なオノマトペとしては、「わおーおん」(ライオンのあくび)、「ピロリン ポロリン」(キリンの背中に雨が降る音)、「ずんか ずんか」(ライオンの走る音)などが見られた。「てん てん てん。 てんとうむし。」など「オノマトペの意味変化」に関わる例も見られた。これらは、特定の作品に現れている。

キーワード：0歳児，1歳児，動物，育児語，オノマトペ

1. はじめに

平安時代以来の絵巻物(注1)、室町時代の奈良絵本、江戸時代の赤本(草双紙の一種)等、日本には古くから絵本が存在した。これらに触れたものは、神立(2004)など多く見られるが、0歳児(注2)向けという認識はないように見受けられる。戦後についてみると、たとえば、坪田ほか(1969)では、400を超える作品を取り上げている。選定基準として「昭和43年12月末までに出版され、現在市販されているものなかから選んだ」という。また「作品を選定するにあたっては、就学前の幼児から、中学生までの年齢を対象とした子どもの本に限定した」という。実際にもっとも小さい子どもを対象とした絵本は、1～2歳対象で8冊挙げられている。ただ、乳児(0歳児)についての詳しい言及はなされていない。

三宅(1997)は、『こどものとも』創刊号から400号まで(1956年～1989年)を分析したものである。年齢別分化については、以下のように記している。

「こどものとも」の歴史が重なる時、そこからまず「普及版こどものとも」(1968年4月)という企画が生まれ、4歳児にターゲットをしばって、既刊の「こどものとも」を組み合わせて販売していく方向が出され、細分化していくことになる(1986年度から「年中向き」という表示となる)。1969年4月には、「かがくのとも」が分化し、77年4月からは「年少版こどものとも」が創刊され、小学生向きに「たぐさんのふしぎ」が85年4月より分化している。また、1995年4月には、「こどものとも0.1.2.」が発刊され、1歳ごとに違った月刊絵本が手渡される体制づくりがなされた。

このことは、その年齢にぴったりはまる絵本の要求に答えることになった反面、失うものも大きい結果をもたらした。絵本が1冊で一つの世界を提示し、その表現方法が単純であることから0歳から80歳までの読者で想定できるという考え方は、まったく違うからである。(三宅 1997,

¹⁾ 山形大学地域教育文化学部

311 頁)

「0歳から80歳まで」といった想定はあるようだが、0歳児が強く意識されるようになったのは、1995年に『こどものとも 0.1.2.』が分化してからと言える。

現在は、生後3か月ごろから使える布絵本もあり、はじめは指でめくるのが楽しいといったような玩具としての側面も持っている。

最近の絵本の研究としては、青柳(2010)、守山(2012)、村上(2013)などが見られる。ただ、これらは、「幼児や学童向け」の絵本を調査したものである。村瀬(2010)は、「3歳未満の子どもたちに向けられた絵本」を調査対象にしているが、発達心理学の分野における研究である。そこで、園田(2015)では、日本語学の分野で、0歳児・1歳児用絵本の資料的位置づけについて、語源を重視しながら、植物・食べ物を中心に考察した。

本稿では、語源や古い用例に触れるのは最小限にとどめ、現在からの視点を重視し、動物(注3)に関わる育児語とオノマトペについて調査し、考察する。これにより、育児語やオノマトペに関する最新の研究の端緒を見出すことができる。具体的には、後述する「非慣習的オノマトペ」の研究、「オノマトペの意味変化」に関する研究に発展させたい。また現代絵本における言語面の実態を明らかにすることにより、国語教育(母語教育)の人生最初期の段階における言語資料に関する基礎的な研究を行いたい。さらには、迂遠な目標かもしれないが、日本語教育(第二言語教育)における活用も目指している。たとえば、日本語を母語としない育児者が、我が子を日本で日本語を用いて育てる場合などが想定される。このケースでは、子への教育は国語教育(母語教育)であるが、育児者がみずから、あるいは配偶者等の協力を得て、絵本から日本語を学ぶことは、日本語教育(第二言語教育)の範疇となる。まさに、母語教育と第二言語教育の狭間の研究ともいえよう。グローバル化が進む現在、このようなケースは増えており、研究の必要性があるにもかかわらず、まだほとんど顧みられていない。このような方面への研究を開拓したいというのも本稿の目的である。

2. 育児語について

小児の言葉は、古くは平安時代の『蜻蛉日記』(藤原道綱母著)に下記のように「片言(かたこと)」と言及された例が見られる。

こゝなる人、片言などするほどになりてぞある。
出づとはかならず「いま来んよ」といふも聞き

もたりて、まねびありく(注4)。

江戸時代には、文化6年(1809年)刊の『浮世風呂』(式亭三馬著)に下記のような例が見られる。引用は『初版本 譚話浮世風呂 前編上 男湯』(注5)(野村貴次蔵本、新典社、複製本、1978)より行ったので、確実な例である。

まずト書きで、「四十余の男、六つばかりの男の子の手をひき、猿(さる)まはしのやうにせなかへ負(おひ)しは、三つばかりの女の子(一六ウ一行目)(注6)と紹介される。続いて、「四十余の男」が、「コレ兄(にい)さんはの、わんへ(の)ぼつちいを踏(ふま)うとしたよ。坊(ぼう)はおとつさんにおんぶだから能(い)の(一六ウ五・六行目)という。江戸では女の子のことも「坊」と言っていた。「せなかのいもと(=三つばかりの女の子)」が、「坊(ぼう)おんぶ(一六ウ六行目)と二語文で言うと、「四十余の男」は「ヲ、ヲ、坊(ぼう)はちやんにおんぶ。兄(にい)さんはあんよ(左ルビ:歩行)。サア下(おんり)しな(一六ウ七行目)と続ける。犬のことを「わんへ」と呼ぶ例が見られるが、これは最も古い方の例である。

文化13年(1816年)刊の『雅語音声考』(注7)(鈴木腹著)の「鳥獸虫ノ声ヲウツセル言」には以下のような記述が見られる。「篤胤云ク、今ノ人小兒ニ物イフニ、猫ヲニヤアニヤアトイヒ、雀ヲチユウチユウト云フ、古ノ鳥獸ニ名ヲ負セシサマ即是也トイヘリ」(42頁6・7行目)(『言語四種論 雅語音声考・希雅』(雅語音声考と希雅は合刊本で東京教育大学蔵本の影印、勉誠社文庫)、1979)

以上、現代仮名遣いで表記すると「わんわん(犬)」「ばばつちい(糞)」「おんぶ(背負うこと)」「あんよ(歩くこと)」「おんり(下りること)」「にやあにやあ(猫)」「ちゅうちゅう(雀)」となる一連の言葉が見られた。これらは、友定(2005)によると、「赤ちゃん言葉」「母乳語」「母親語」「幼児語」「育児語」など種々の呼び方があり、またその定義もまちまちである。

「乳児」「幼児」の定義は様々あって、日常生活では幅広い使われ方をしている。ただ、1947年制定の児童福祉法では、「満1歳に満たない者」を乳児、「満1歳から、小学校就学の始期に達するまでの者」を幼児と定義している。この定義からは「幼児語」は満1歳以上が対象になるニュアンスが濃くなり、0歳児を対象にしている本稿では、使いにくい。敢えて言うならば「乳幼児語」であろうか。いずれにしても、「幼児語」「乳幼児語」という用語は、幼児や乳幼児が話すという印象を受けやすい。ただ、0歳児では喃語の場合が

多く、自ら「わんわん」「くまさん」などと言うにはもう少し時間が必要である。

この問題を解決するには「育児語」という用語がよい。この用語の定義も種々存在するが、広義では、育児で用いる語や表現すべてが「育児語」であるとも言える。ただ、これでは、漠然としすぎるので、友定(2005)の考え方も参考にして、狭義の定義を考えると右のようになる。

本稿における「育児語」の定義(狭義)

育児者が育児等で乳幼児に用いる語や表現のうち、乳幼児にのみ用いるか、あるいは、乳幼児に用いることが多いという特徴のある語や表現。育児者と被育児者の相互作用により形成されるが、育児者のベリーフにより一方向的なものもある。乳幼児向けの特別な声の調子等の差違については別に考える。この狭義の育児語に対する用語としては「成人語」を用いる。

この本稿での定義に従って、以下論じてゆく。

3. 調査資料と調査方法

3.1. 調査資料

調査資料は、園田(2015)で用いたものと同じである。対象年齢を明示している『こどものとも0.1.2.』、および、これをもとにした『0.1.2.えほん』を調査した。『こどものとも0.1.2.』は福音館書店発行の月刊絵本で、出版社の冊子によると、「0.1.2.」の名の通り、0歳(10か月)から2歳向きとあり、0歳児・1歳児が対象に入っている。『0.1.2.えほん』は、月刊絵本から厳選した作品を上製本にしたものなので、読者の側からも一定の支持を得たものであると言える。本稿では、下記の資料を調査対象とした。

(1) 『0.1.2.えほん』45冊(上製本)(資料番号a1～a45)(注8)

(2) 『こどものとも0.1.2.』12冊(2013年11月号～2014年10月号,月刊誌)(資料番号b1～b12)(注9)

合わせて57冊である。作者や刊年等の詳細は、園田(2015)に掲げたので参照されたい。以下、書名のみ簡略化して示すことにする。

【調査資料】(福音館書店刊行,1995年創刊)

a1『あめかな!』, a2『ありのあちち』, a3『いちじく にんじん』, a4『おーい おーい』, a5『おおきい ちいさい』, a6『おーくん おんぶ』, a7『おさんぽ おさんぽ』, a8『かさ さしてあげるね』, a9『かん かん かん』, a10『き

たきた うずまき』, a11『ぎったんこ ばったんこ』, a12『くつく くつく』, a13『くりんくりん ごーごー』, a14『ここよ ここよ』, a15『こちよこちよ』, a16『ごぶごぶ ごぼごぼ』, a17『こやぎが めえめえ』, a18『こりゃ まてまて』, a19『ころころにやーん』, a20『ごろんご ゆきだるま』, a21『こんにちは どうぶつたち』, a22『すってん ころりん』, a23『だれかな? だれかな?』, a24『たんたん ぼうや』, a25『ちゅっ ちゅっ』, a26『でてこい でてこい』, a27『てん てん てん』, a28『とってください』, a29『ばか ばか』, a30『はしるの だいすき』, a31『はねはね はねちゃん』, a32『はりねずみ かあさん』, a33『バルンくん』, a34『バルンくんとともだち』, a35『ばん だいすき』, a36『ぶうさんのプー』, a37『ぶーぶー じどうしゃ』, a38『ぶー ぶー ぶー』, a39『ぼぼんぴ ぼんぼん』, a40『ぼん ちん ばん』, a41『まるくて おいしいよ』, a42『もう おきるかな?』, a43『もじゃらんこ』, a44『よくきたね』, a45『らっこちゃん』, b1『ならんだ ならんだ』, b2『でんしゃごっこ』, b3『ピリンポリン』, b4『こぶたの おでかけ』, b5『おひさま いっぱい』, b6『いいところ いくの』, b7『ふわふわ ぶー』, b8『くまさん はい』, b9『おかお ない ない』, b10『ほおずき ほおずき』, b11『やもりのモリー』, b12『ばんばん あーん』

3.2. 調査方法

調査資料で掲げた57冊の中で、動物の絵と動物を表す言葉が何冊に何例現れているかを調査した。冊数は「異なり」と考えてよいので、この多寡を優先した。例数は「延べ」に当たるので、冊数が同じ場合に例数の多い順に並べた。

まず、動物の絵と動物の呼び名が現れている場合は、出現語形を詳細に分類し、例数を数えた。特に、下記の(1)～(5)(重複する例もある)のような育児語と思われる例は特記した。

- (1) 接尾辞「さん」「くん」「ちゃん」の付加・・・ぞうくん(象)等
- (2) 一般名の反復・・・ねこねこ(ネコ)等
- (3) 接頭辞「お」の付加・・・おさる(サル)等
- (4) オノマトペの転用・・・わんわん(イヌ)等
- (5) 臨時一語(育児語らしいもの)・・・おかあさんぐま等

次に、動物の絵と動物に関連するオノマトペ等(鳴

き声・動作に関する表現)が現れている場合(注10)も例数に加えた。さらに、呼び名等がなく動物の絵のみが現れている場合は、動物の絵の数に依らず、1冊1例と数えた。

4. 調査結果と考察

調査を行った57冊の中に、動物は全部で57種類現れていた。これを多くの冊数に表れるかどうか(つまり、「異なり」という観点から、「4.1. 10冊以上に登場する動物」「4.2. 5冊以上に登場する動物」「4.3. 4冊以下に登場する動物」に分けて、用例とともに掲げる。

続いて、4.4. で育児語のまとめを行い、「4.5. 動物と共起する慣習的なオノマトペ」「4.6. 動物と共起する非慣習的なオノマトペ」で共起する表現(オノマトペ)に言及する。

4.1. 10冊以上に登場する動物

クマ・ネコ・ウサギ・イヌ・ゾウの5種類(1割)が10冊以上に現れていた。

4.1.1. クマ(13冊・34例)

クマは13冊に34例現れている。出現語形は「くま」2例、「くま くま」1例、「くまさん」25例、「おかあさんぐま」1例、「こぐま」1例であった。絵のみ現れている絵本は4冊(4例)であった。「くま くま」、「くまさん」、「おかあさんぐま」が育児語に当たる。以下に用例を挙げる。

①くりん くりん くまが いちりんしゃで やってき くりん くりん と いってしまった(a13 『くりんくりん ごーごー』)

②「くま くま よくねているね。 もう おきるかな?」「あー、おきた!」(a42 『もう おきるかな?』)

③「ぼぼんぴ ぼんぼん くまさんの おへそは どーこ」「ここ」(a39 『ぼぼんぴ ぼんぼん』)

④「おいで おいで ここまで おいで おかあさんぐまが こぐまを よんでいます(a44 『よくきたね』)

4.1.2. ネコ(12冊・23例)

ネコは12冊に23例現れている。出現語形は「ねこねこ」1例、「ねこさん」1例、「ねこちゃん」2例、「おかあさんねこ」1例、「こねこ」1例であった。絵のみ現れている絵本は4冊(4例)であった。関連するオノマトペとして、「にゃーん」(鳴き声)11例、「にゃ

んにゃん」(鳴き声)1例が見られた。また、「にゃあにゃあれっしや」のように、鳴き声を含む語も1例見られた。「ねこさん」、「ねこちゃん」、「おかあさんねこ」、「にゃあにゃあれっしや」が育児語と言える。以下に用例を挙げる。

⑤「ねこ ねこ よくねているね。 もう おきるかな?」「あー、おきた!」(a42 『もう おきるかな?』)

⑥ねこさん こちょこちょ(a15 『こちょこちょ』)

⑦ほら、ねこちゃんの せなか おひさまで ふわふわだ。(b5 『おひさま いっぱい』)

⑧かん かん かん にゃあにゃあれっしやが とおります にゃんにゃん にゃんにゃん にゃんにゃん にゃんにゃん(a9 『かん かん かん』)

4.1.3. ウサギ(10冊・28例)

ウサギは10冊に28例現れている。出現語形は「うさぎ」5例、「うさぎさん」5例、「うさちゃん」1例、「くろうさぎ」1例、「しろうさぎ」1例であった。絵のみ現れている絵本は3冊(3例)であった。結びつきの強いオノマトペとして、「びよん」(動作)4例、「びよーん」(動作)2例、「びよん びよん(びよん びよん)」(動作)4例、「びよーん、びよん」(動作)1例、「びよん びよん びよん」(動作)1例が見られた。「うさぎさん」、「うさちゃん」が育児語と言える。

⑨うさぎが びよんと とんできて うさぎの たいそう びよん びよん びよん(a31 『はねはね はねちゃん』)

⑩すると ねずみさんの あとから、うさぎさんが びよん びよん とんできて、たおるに とびのりしました。(a22 『すってん ころりん』)

⑪うさちゃんも ちゅっちゅっ (a25 『ちゅっちゅっ』)

4.1.4. イヌ(10冊・11例)

イヌは10冊に11例現れている。出現語形は「いぬ」1例、「いぬ いぬ」1例、「いぬさん」1例、「おかあさんいぬ」1例、「こいぬ」1例、「わんちゃん」1例である。絵のみ現れている絵本は3冊(3例)であった。関連するオノマトペとして、「わんわん」(鳴き声)1例、「ワオーン」(鳴き声)1例が見られた。「いぬ いぬ」、「いぬさん」、「おかあさんいぬ」、「わんちゃん」が育児語と言える。「わんちゃん」の「わん」は鳴き声がもとになっている。

⑫「いぬ いぬ よくねているね。 もう おきるかな?」「あー、おきた!」(a42 『もう おきるかな?』)

⑬いぬさんも おんぶして (a 6 『おーくん おんぶ』)

⑭わんちゃん と まま ちゅっちゅっ (a 25 『ちゅっ ちゅっ』)

⑮とっこ とっこ わんわん (a 20 『ごろんご ゆきだるま』)

⑯カタカタ カタカタ 「ワオーン！」 (b 3 『ピリンポリン』)

4.1.5. ソウ (10冊・10例)

ソウは10冊に10例現れている。出現語形は「ぞう」4例、「ぞう ぞう」1例、「ぞうくん」1例、「ぞうさん」2例である。絵のみ現れている絵本は1冊(1例)であった。結びつきの強いオノマトペとして、「のっし、のっし、のっし」〈動作〉1例が見られた。「ぞう ぞう」、「ぞうくん」、「ぞうさん」が育児語と言える。

⑰こんにちは ぞう (a 21 『こんにちは どうぶつたち』)

⑱ぞうくんも ちゅっちゅっ (a 25 『ちゅっ ちゅっ』)

⑲ぞうさんの せなかに あめが ふる ピッチャン パッチャン ピッチャン (a 8 『かささしてあげるね』)

⑳「だれか かくれてるよ でてこい でてこい」 「のっし、のっし、のっし」 (a 26 『でてこい でてこい』)

4.2. 5冊以上に登場する動物

ブタ・アリ・チョウ・ニワトリ・キリン・ライオンの6種類(1割)が5冊以上に現れていた。

4.2.1. ブタ (7冊・21例)

ブタは7冊に21例現れている。出現語形は「ぶた」1例、「ぶたさん」1例、「おかあさんぶた」1例、「こぶた」2例、「ぶうさん」〈固有名詞〉2例である。絵のみ現れている絵本は2冊(2例)であった。関連するオノマトペとして、「ブー」〈鳴き声〉10例、「ぶーぶー」〈鳴き声〉1例、「ブーブーブー」〈鳴き声〉1例が見られた。「ぶたさん」、「おかあさんぶた」が育児語と言える。固有名詞で「ぶうさん」と呼ばれるブタは、何でも「ブー」ということからの命名である。

㉑ぶーぶー ごーごー ぶたが たくさん ばすできて ぶあーん と いってしまったよ (a 13 『くりんくりん ごーごー』)

㉒ぶたさんも おんぶ (a 6 『おーくん おんぶ』)

㉓「おはよう おはよう ぶうさんの ブー」「おいしいは ブー」 (a 36 『ぶうさんのブー』)

4.2.2. アリ (7冊・7例)

アリは7冊に7例現れている。出現語形は「あり」1例、「ありさん」5例である。絵のみ現れている絵本は1冊(1例)であった。「ありさん」が育児語と言える。

㉔ありの あちち (a 2 『ありの あちち』, 書名)

㉕ならんだ ならんだ ありさん ならんだ と と どこ いくの? (b 1 『ならんだ ならんだ』)

4.2.3. チョウ (6冊・15例)

チョウは6冊に15例現れている。出現語形は「ちょうちょ」2例である。結びつきの強いオノマトペとして、「ひらひら」〈動作〉1例、「ひら ひら ひら」〈動作〉1例、「ひら ひら ひら ひら」〈動作〉1例が見られた。チョウやガの幼虫であるケムシやイモムシも便宜的にここに加えた。ケムシをその様子から「もじゃらんこ」〈幼虫名〉と呼ぶ例が9例見られた。また、幼虫であるイモムシの絵のみ現れている絵本が1冊(1例)あった。「ちょうちょ」、「もじゃらんこ」が育児語と言える。

㉖ちょうちょが ひらひら (a 17 『こやぎが めえめえ』)

㉗「うわーっ でてきた でてきた もじゃらんこ どこ いくの? どこ いくの?」「わからん わからん もじゃ もじゃ あっち じゃら じゃら こっち」 (a 43 『もじゃらんこ』)

4.2.4. ニワトリ (6冊・7例)

ニワトリは6冊に7例現れている。出現語形は「にわとり」1例、「ニワトリ」1例、「にわとりさん」1例であった。絵のみ現れている絵本は1冊(1例)であった。「にわとりさん」が育児語と言える。雛をヒヨコと呼ぶ例が1例見られた(注11)。これに関連するオノマトペとして、「び び び」〈雛の鳴き声〉1例も見られた。雛の絵のみ現れている絵本が1冊(1例)あった。

㉘どこに いるの? ニワトリの あかちゃん (a 14 『ここよ ここよ』)

㉙にわとりさん こちょこちょ (a 15 『こちょこちょ』)

㉚ひよこ び び び (b 7 『ふわふわ ふう』)

4.2.5. キリン (6冊・6例)

キリンは6冊に6例現れている。出現語形は「きりん」2例、「きりんさん」2例である。絵のみ現れている絵本は2冊(2例)であった。「きりんさん」が育児語と言える。

㉑「どっば どっば はしってくるの だれかしら」
「どっば どっば みんなで はしる きりん」(a 30 『はしるの だいすき』)

㉒「きりんさんの せなかに あめが ふる ピロリン ポロリン ピロリン ポロリン」(a 8 『かささしてあげるね』)

4.2.6. ライオン (5冊・8例)

「ライオン」は5冊に8例現れている。出現語形は「らいおん」5例であった。関連するオノマトペとして、「がおーっ」〈鳴き声〉1例、「わおーおん」〈鳴き声・欠伸〉1例が見られた。絵のみ現れている絵本は1冊(1例)であった。

㉓いっしょに ぴよんぴよん はねていたら
がおーっと うなつて らいおんが やってきた (a 24 『たんたん ぼうや』)

㉔らいおん わおーおん おおあくびした みんなも
あーうおん あくびした (a 24 『たんたん ぼうや』)

4.3. 4冊以下に登場する動物

46種類(8割)の動物が4冊以下に現れていた。

4.3.1. 4冊に登場する動物(サル・カメ・カエル)

4冊に現れる動物は以下の3種類であった。

サル9例(4冊,「おさる」2例,「おさるさん」2例,「きゃっきゃっ」〈鳴き声〉4例,絵のみ1例),カメ5例(4冊,「かめさん」3例,絵のみ2例),カエル4例(4冊,「かえるさん」3例,「げこ,げこ,げこ」〈鳴き声〉1例)

この中で育児語に当たるものは,「おさる」,「おさるさん」,「かめさん」,「かえるさん」である。

㉕いっしょに たんたん あるいていったら きゃっきゃっ おさるが やってきた (a 24 『たんたん ぼうや』)

4.3.2. 3冊に登場する動物

(カタツムリ・トリ(総称)・ハト)

3冊に現れる動物は以下の3種類であった。

カタツムリ3例(3冊,「かたつむり」1例,「かたつむりさん」2例),「トリ(総称)」3例(3冊,絵のみ3

例),ハト3例(3冊,「はとさん」1例,「ばさ ばさばさ」〈羽音〉1例,絵のみ1例),

この中で育児語に当たるものは,「かたつむりさん」,「はとさん」である。

㉖かたつむりさんも おさんぽ(a 7 『おさんぽ おさんぽ』)

4.3.3. 2冊に登場する動物(ラッコなど9種類)

2冊に現れる動物は9種類であった。このうち3例以上の用例があるものは以下の4種類である。

ラッコ12例(2冊,「ラッコ」1例,「らっこちゃん」11例),ウマ11例(2冊,「ばか ばか」〈動作〉9例,「ばか ばか ばか」〈動作〉1例,絵のみ1例),ネズミ9例(2冊,「ねずみさん」9例),ハリネズミ6例(2冊,「はりねずみ」1例,「はりねずみ かあさん」5例)

この中で育児語に当たるものは,「らっこちゃん」,「ねずみさん」,「はりねずみ かあさん」である。

㉗らっこちゃん かつかつ (a 45 『らっこちゃん』)

2冊に2例現れた動物は以下の5種類である。

オランウータン2例(2冊,「オランウータン」1例,「おらんうーたんさん」1例),カマキリ2例(2冊,「かまきり」1例,「かまきりさん」1例),コアラ2例(2冊,「こあら」1例,「コアラ」1例),チーター2例(2冊,「ちーたー」2例),パンダ2例(2冊,「ぱんだちゃん」1例,絵のみ1例),

この中で育児語に当たるものは,「おらんうーたんさん」,「かまきりさん」,「ぱんだちゃん」である。

㉘「ほら ほら かまきりさんも おかお ない ない ない」「ばあ」(b 9 『おかお ない ない』)

4.3.4. 1冊のみに登場する動物(ヤギなど31種類)

1冊のみに現れる動物は31種類(5割)であった。このうち2例以上の用例があるものは以下の7種類である。

ヤギ10例(1冊,「かあさんやぎ」1例,「こやぎ」9例),アヒル4例(1冊,「があ があ」〈鳴き声〉4例),ヤモリ4例(1冊,「やもり」2例,「モリー」〈固有名詞〉2例),サカナ(総称)3例(絵のみ3例),フクロウ3例(1冊,「ふくろうおやこ」1例,「ポーポー」〈鳴き声〉2例),ホタル3例(1冊,「ほたる」3例),ガチョウ2例(1冊,「がちょう」1例,「があ があ があ」〈鳴き声〉1例)

この中で育児語に当たるものは,「かあさんやぎ」,「ふくろうおやこ」である。

㉑「だれかな? だれかな?」「ボーボー ボーボー
ふくろうおやこ」(a 23 『だれかな? だれかな?』)

1冊1例のみ現れた動物は以下の24種類である。以下、簡略化して列挙する。

オオカミ1例(「おおかみ」1例), ガ1例(「が」1例), カップ1例(絵のみ1例), カニ1例(「かにさん」1例), カバ1例(「かばさん」1例), カピバラ1例(「かびばら」1例), カンガルー1例(絵のみ1例), キョウリュウ(総称)1例(絵のみ1例), ゴリラ1例(「ごりら」1例), サイ1例(「さいさん」1例), シマウマ1例(「しまうま」1例), ダンゴムシ1例(「だんごむしさん」1例), チンパンジー1例(絵のみ1例), テントウムシ1例(「てんとうむし」1例), トカゲ1例(「しゅる しゅる しゅる」〈動作〉1例), ハチ1例(絵のみ1例), ヒツジ1例(絵のみ1例), ヘビ1例(「による による による」〈動作〉1例), ペンギン1例(「ペンギン」1例), ポニー1例(「ぼにー」1例), マレーグマ1例(「まれーぐま」1例), マンボウ1例(「まんぼう」1例), リス1例(1冊, 「りす りす」1例), レッサーパンダ1例(「れっさーぱんだ」1例)

この中で育児語に当たるものは、「かにさん」, 「さいさん」, 「だんごむしさん」, 「りす りす」である。

㉒「さいさん きれいな はっぱを とってください」
「こんなに たくさん ありがとう」(a 28 『とってください』)

4.4. 育児語のまとめ

動物に育児語を使うかどうかは、作品によるかたよりが大きい。これとともに、動物の種類によっても違ってくる。たとえば、5冊に現れるライオンは5例とも全て成人語であったが、4冊に現れるサル、カメ、カエルは合わせて10例すべてが育児語であった。拍数や動物の与える印象と関係がありそうである。57種類の動物すべてについてまとめると以下の通りである。

(ア) 育児語・・・26種123例(注12)(65%)

(1) 接尾辞「さん」「くん」「ちゃん」の付加・・・23種88例(47%)

(1-1) 「さん」の付加・・・21種71例

「くまさん」25例, 「ねこさん」1例, 「うさぎさん」5例, 「いぬさん」1例, 「ぞうさん」2例, 「ぶたさん」1例, 「ありさん」5例, 「にわとりさん」1例, 「きりんさん」2例, 「かめさん」3例, 「かえるさん」3例, 「かたつむりさん」2例, 「はとさん」1例, 「ねずみさん」9例, 「おらんうーたんさん」1例, 「かまきりさん」1例, 「かにさん」1例, 「かばさん」1例, 「さいさん」1

例, 「だんごむしさん」1例, 「ぶうさん」〈固有名詞〉2例(重複), 「おさるさん」2例(重複)

(1-2) 「くん」の付加・・・1種1例

「ぞうくん」1例

(1-3) 「ちゃん」の付加・・・5種16例

「ねこちゃん」2例, 「うさちゃん」1例, 「らっこちゃん」11例, 「ぱんだちゃん」1例, 「わんちゃん」1例(重複)

(2) 一般名の反復・・・6種7例

「くま くま」1例, 「ねこ ねこ」1例, 「いぬ いぬ」1例, 「ぞう ぞう」1例, 「ちょうちょ」2例, 「りす りす」1例

(3) 接頭辞「お」の付加・・・1種4例

「おさる」2例, 「おさるさん」2例(重複)

(4) オノマトペの転用・・・3種12例

「もじゃらんこ」9例, 「わんちゃん」1例(重複), 「ぶうさん」〈固有名詞〉2例(重複)

(5) 臨時一語(育児語らしいもの)・・・8種12例

「おかあさんぐま」1例, 「おかあさんねこ」1例, 「にやあにやあれっしゃ」1例, 「おかあさんいぬ」1例, 「おかあさんぶた」1例, 「はりねずみ かあさん」5例, 「かあさんやぎ」1例, 「ふくろうおやこ」1例,

(イ) 成人語・・・31種66例(35%)

「くま」2例, 「こぐま」1例, 「こねこ」1例, 「うさぎ」5例, 「くろうさぎ」1例, 「しろさぎ」1例, 「いぬ」1例, 「こいぬ」1例, 「ぞう」4例, 「ぶた」1例, 「こぶた」2例, 「あり」1例, 「にわとり」1例, 「ニワトリ」1例, 「ひよこ」1例, 「きりん」2例, 「らいおん」5例, 「かたつむり」1例, 「ラッコ」1例, 「はりねずみ」1例, 「オランウータン」1例, 「かまきり」1例, 「こあら」1例, 「コアラ」1例, 「ちーたー」2例, 「こやぎ」9例, 「やもり」2例, 「はたる」3例, 「がちょう」1例, 「おおかみ」1例, 「が」1例, 「かびばら」1例, 「ごりら」1例, 「しまうま」1例, 「てんとうむし」1例, 「ペンギン」1例, 「ぼにー」1例, 「まれーぐま」1例, 「まんぼう」1例, 「れっさーぱんだ」1例

育児語の重複例を含め、全体で189例見られた。うちわけは、育児語が26種123例(65%), 成人語が31種66例(35%)であった。育児語の中では、接尾辞「さん」「くん」「ちゃん」の付加が最も多く、23種88例であり、育児語・成人語を含めた全体の47%を占めている。

4.5. 動物と共起する慣習的なオノマトペ

ネコという言葉の語源説は種々見られるが、小松・鈴木(2011)では「『ねこ』の『ね』は、その鳴き声から来たものだろう」という。本稿の調査でイヌのことを育児語で「わんちゃん」という例が見られたが、これは「わんわん」という鳴き声を語源とする命名である。特徴的だと思われるものが命名に結びつく一例である。5冊以上に登場する11種類の動物を鳴き声・動作と関連するオノマトペと共起するかどうかという観点から分類すると以下の通りである。

(1) 鳴き声を表すオノマトペと共起するもの

ネコ(「にゃーん」, 「にゃんにゃん」)・イヌ(「わんわん」, 「ワオーン」)・ブタ(「ブー」, 「ぶーぶー」, 「ブーブーブー」)・ライオン(「がーっ」)・ニワトリ(雛)(「ぴ ぴ ぴ」)

(2) 動作を表すオノマトペと共起するもの

ウサギ(「ぴょん」, 「ぴょーん」, 「ぴょん ぴょん(ぴょんぴょん)」, 「ぴょーん ぴょん」, 「ぴょん ぴょん ぴょん」)・チョウ(成虫)(「ひらひら」, 「ひら ひらひら」, 「ひら ひら ひら ひら」)・ゾウ(注13)(「のっし, のっし, のっし」)

(3) 特に共起するオノマトペが見られないもの

クマ・アリ・チョウ(幼虫)・ニワトリ(成鳥)・キリン(注14)

以上は、本稿での調査結果をもとにした分類である。ある動物に関して、鳴き声や動作を表すオノマトペが存在するかどうかという観点からはまた別の結果が得られるが、本稿の趣旨から逸れるため割愛する。

4.6. 動物と共起する非慣習的なオノマトペ

慣習的なオノマトペのほかに、非慣習的なオノマトペも多数現れている。慣習的なものから非慣習的なものまで連続的である。ひとまず、小野(2007), 『日本国語大辞典(第2版)』(小学館), 『現代日本語書き言葉均衡コーパス(少納言)』(国立国語研究所・文部科学省)に用例を見出せないものを非慣習的と見なすこととする。

非慣習的なオノマトペのうち、動物に関連するものの例を挙げると以下の通りである。

㉔で示した「わおーおん」(ライオンのあくび), 「あーうおん」(ライオンのあくびを真似たみんなのあくび)。

㉔で示した「ピロリン ポロリン」(キリンの背中に雨が降る音)

㉔で示した「どっば どっば」(注15)(みんなで走るキリン)

このほか以下のような例も見られ、作品によるかたよりが大きい。

㉔「ばんか ばんか はしってくるの だれかしら」
「ばんか ばんか みんなで はしる しまうま」(a 30 『はしるの だいすき』)

㉔「ずんか ずんか はしってくるの だれかしら」
「ずんか ずんか はしってくるのは らいおんだ」
(a 30 『はしるの だいすき』)

㉔「ごすん ごすん ごすん ごすん」「ごすん ごすん はしって きたのは ぞうでした」(a 30 『はしるの だいすき』)

意味の変容という観点からは、下記のような例も見られた。

㉔「てん てん てん。 てんとうむし。」(a 23 『だれかな? だれかな?』)

これは、語源的には「天道虫」なのだが、背中に「点」があるので、漢語の「点々」や「点」と関わらせた例と言える。動物に限らず、他にも「茹で卵」を「ゆでゆでたまご ころん ころん」(a 4 『おーい おーい』)と表現して「ゆれている」様子を表すオノマトペとして用いる用法が見られる。これらは、「オノマトペの意味変化」(注16)の例として注目される。

5. まとめと今後の課題

『0.1.2. えほん』45冊および『こどものとも 0.1.2.』12冊(ともに福音館書店発行), 計57冊を資料として、この中に現れる動物と育児語について調査し考察した。この57冊は、0歳児・1歳児・2歳児を対象にしたものであるが、2歳児からは『こどものとも年少版』もあるため、0歳児・1歳児向けとした。

調査を行った57冊の中に、動物は全部で57種類現れていた。動物名、動物に関連するオノマトペ、および、動物の絵のみ現れた場合を合わせた総数は298例である。これを多くの冊数に表れるかどうか(つまり、「異なり」という観点から分類すると、10冊以上・5種類(1割), 5冊以上9冊以下・6種類(1割), 4冊・3種類, 3冊・3種類, 2冊9種類, 1冊・31種類(5割)となった。全体の半数以上が1冊にしか現れていないことが分かる。

5冊以上に現れた動物を多い順に挙げると左のようになる。

クマ・ネコ・ウサギ・イヌ・ゾウ・ブタ・アリ・
チョウ・ニワトリ・キリン・ライオン

詳細は以下の通りである。

クマ(13冊・34例), ネコ(12冊・23例), ウ

サギ (10冊・28例), イヌ (10冊・11例), ゾウ (10冊・10例), ブタ (7冊・21例), アリ (7冊・7例), チョウ (6冊・15例, ケムシ・イモムシを含む), ニワトリ (6冊・7例, 雛を含む), キリン (6冊・6例), ライオン (5冊・8例)

57種類の動物の呼び名は、全体で189例(育児語の重複例を含む)見られた。うちわけは、育児語が26種123例(65%), 成人語が31種66例(35%)であった。育児語の中では、接尾辞「さん」「くん」「ちゃん」の付加が最も多く、23種88例であり、育児語・成人語を含めた全体の47%を占めている。このほかの育児語の例としては、「ねこ ねこ」等の一般名の反復、「おさる」等接頭辞「お」の付加、「もじゃらんこ」等オノマトペの転用、「おかあさんいぬ」等臨時一語(育児語らしいもの)が見られた。

動物と共起する慣習的なオノマトペとしては、鳴き声を表すオノマトペと共起するものとして、ネコの「にゃーん」、「にゃんにゃん」等が見られた。また、動作を表すオノマトペと共起するものとして、ウサギの「びよん」、「びよーん」、「びよん びよん〈びよんびよん〉」、「びよーん, びよん」、「びよん びよんびよん」が挙げられる。

動物と共起する非慣習的なオノマトペとしては、「わおーおん」(ライオンのあくび)、「あーうおん」(ライオンのあくびを真似たみんなのあくび)、「ピロリンポロリン」(キリンの背中に雨が降る音)、「どっばどっば」(みんなで走るキリン)、「ばんか ばんか」(みんなで走るシマウマ)、「ずんか ずんか」(ライオンの走る音)、「ごすん ごすん」(ゾウの走る音)などが見られた。「てん てん てん。 てんとうむし。」など「オノマトペの意味変化」に関わる例も見られた。これらは、特定の作品に現れている。

以上、実際の育児語との比較、他の絵本との比較等行うべき課題は多いが、現代絵本における言語面の実態を明らかにすることができた。今後は、以上の成果を国語教育(母語教育)や日本語教育(第二言語教育)へ応用していくことを考えている。国語教育(母語教育)の分野では、人生最初期の段階に関係する言語の一端を示すことができたので、これをどう活用するかが課題である。日本語教育(第二言語教育)関連では、我が子を日本で日本語を用いて育てる場合、日本語を母語としない育児者が絵本から日本語を学ぶ際の効果的な手法の開発等が急がれる。

【注】

(1) 絵巻物である「鳥獣戯画」(全4巻)の第1巻(12世紀後半作)は、動物を擬人化して描いた作品として広く知られている。

(2) 数えでは1・2歳児。

(3) 「動物」の定義は種々ある。本稿では、生物を二つに大別したときの植物に対するもので、人類を除いた一群とする。哺乳類(人類以外)、鳥類、爬虫類、両生類、魚類、昆虫などが含まれる。本稿の用例には、キョウリュウ(絶滅した動物)・カッパ(想像上の動物)を含めた。

(4) 引用は、『新日本古典文学大系 土佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記』(岩波書店)(57頁)による。「こゝなる人」は作者の子である道綱(このとき数えで四歳)を指す。夫である兼家が「またすぐ来るよ」というのを道綱が聞き覚えて口まねしてまわっている様子が描かれている。

(5) 新典社の複製本に丁付が見られないので、「浮世風呂大意」の始まりを一オ(表)とすると、引用箇所は全て一六ウ(裏)となる。

(6) 当然のことながら、数えで紹介されているので、現在の満年齢で考える必要がある。たとえば、「四十余の男」が数えで41歳だとすると満年齢では39~40歳ということになるが、細かいことを考えなければ、「四十余の男」は、満年齢でも「四十余の男」としても大差はない。ただ、小児の差違は大きく、「六つばかりの男の子」は、満年齢では「4・5歳の男の子」である。同じく「三つばかりの女の子」は、満年齢では「1・2歳の女の子」となる。

(7) 資料の詳細については古田(1968)参照。

(8) 2014年9月の調査終了時点で実際に販売されていたもの全てを調べた。絶版となっている1冊は除外した。

(9) 2014年9月の調査終了時点で入手できた最新号が2014年10月号であったため、2013年11月号から1年分をバックナンバーとして取り寄せて調査した。

(10) 鳴き声に関するオノマトペは全て扱った。動作に関するオノマトペについては、5冊以上に現れる動物についてのみ例数に加えた。

(11) ヒヨコはニワトリの雛に限った名ではないが、ニワトリの雛の場合が多いので、この項目で扱った。

(12) 重複を含んだ例数。「モリー」〈固有名詞〉2例については、成人語にも育児語にも含めなかった。

(13) ゾウの鳴き声として、小野(2007)には「ばおん」が載っており、実際によく見聞きするが、本稿の

調査では見られなかった。

(14) ニワトリ〈成鳥〉の鳴き声として、小野(2007)には「こけこっこー」等が載っており、実際によく見聞きするが、本稿の調査では見られなかった。

(15) 江戸時代に「慌てて急ぐ様子」の意で「どっばさっぱ」という例が見られる。ただ、特にキリンと結びついたものではない。

(16) 小野(2015)は「オノマトペの意味変化を扱ってみて、オノマトペ、ひいては意味変化というものが、実に魅力的で面白いものだという思いを新たに。そして、その調査・考察がいかに難しいかということも改めてよく分かった」という。

【参考文献】

青柳旬(2010)「絵本に現れる非慣習的オノマトペの特徴—慣習的オノマトペと非慣習的オノマトペの形態—」(『日語日文学研究〔日本語学・日本語教育学篇〕』第73輯1巻, 韓国日語日文学会発行)

小野正弘(2007)『日本語オノマトペ辞典』(小学館)

小野正弘(2015)『感じる言葉 オノマトペ』(KADOKAWA)

神立幸子(2004)『日本の昔話絵本の表現—「かちかち山」のイメージの諸相—』(てらいんく)

小松寿雄・鈴木英夫(2011)『新明解語源辞典』(三省堂)

園田博文(2015)「〇歳児・一歳児用絵本に現れる植物・食べ物一名の由来と特徴—」(『近代語研究第18集』, 近代語学会編, 武蔵野書院刊)

坪田譲治・吉田精一・波田野完治・阪本一郎・滑川道夫・室伏武(1969)『子どもの本の事典』(第一法規)

友定賢治(1997)『全国幼児語辞典』(東京堂出版)

友定賢治(2005)『育児語彙の開く世界(生活語彙の開く世界 4)』(和泉書院)

古田東朔(1968)「『言語音声考』から『雅語音声考』へ」(『国語と国文学』45巻2号)

前田富祺・前田紀代子(1996)『幼児語彙の統合的発達の研究』(武蔵野書院)

正高信男(1993)『0歳児がことばを獲得するとき—行動学からのアプローチ』(中央公論新社)

三宅興子(1997)『日本における子ども絵本成立史—「こどものとも」が果たした役割—』(ミネルヴァ書房)

村上康子(2013)「日本語絵本における語の使用の特

徴と伝達内容」(『東アジア日本語教育・日本文化研究』第16輯, 東アジア日本語教育・日本文化研究学会発行)

村瀬俊樹(2010)『社会—文化的環境における子どもの語彙獲得』(多賀出版)

守山恵子(2012)「日本語学習者は絵本で何が学べるか」(『福岡女学院大学紀要 人文学部編』第22号)

謝辞

ジェリー・ミラー先生には英文題名の作成にあたり貴重なご指摘をいただきました。記して謝意を表します。